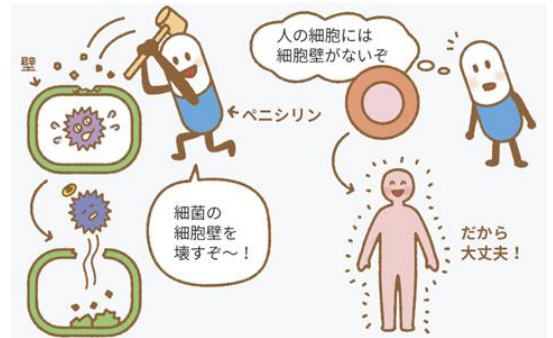


抗生剤について～最近効かない菌が増えています～

舞鶴共済病院 薬剤科

1. 抗生剤とはなんぞや？

抗生剤（抗菌薬）とは細菌を壊したり、増えるのを抑えたりする薬のことを指します。抗生剤は細菌の構造や増えていく仕組みのどこかを邪魔して効果を発揮します。例えば、代表的な抗生剤であるペニシリンは細菌の細胞壁の合成を邪魔します。ヒトと細菌の大きな違いに細胞壁があるかどうか、ということが挙げられます。ヒトの細胞には細胞壁がありません。そのため、ペニシリンはヒトの細胞に影響を与えず、細菌のみを攻撃することができるのです。このように抗生剤は細菌の仕組みを利用した薬ですので、**細菌以外の病原体である真菌（かび、酵母など）やウイルスが原因となる感染症には効果を期待できません。**



2. 抗生剤の効果がない菌が増えているのはなぜ？

抗生剤は、人への毒性は低いですが、細菌にとっては猛毒です。そのため、細菌は様々な手段でその毒から逃げ延びようとします。それを耐性といい、その仕組みは細菌が本来もっていたり、他の細菌から譲り受けたり、抗生剤投与により誘導されたりします。体の中で**抗生剤投与により大多数の細菌がやられてしまうと、抗生剤に対する耐性を得ていた細菌はどんどん勢力を拡大することができるようになります。**また例えば5日間飲むべき抗生剤をよくなったから1日でやめてしまった、本当は1日3回飲まなければいけない抗生剤を1回でやめてしまったなど、抗生剤が中途半端に効いた状態になるとさらなる問題が起こります。しっかり使っていればやっつけられていたはずの耐性菌が生き残り（耐性菌の中には全く薬が効かない菌だけでなく、十分な量を使えば倒せるものもあります）、薬に弱い菌だけがいなくなるという、「耐性菌に甘く、耐性をもたない菌に厳しい」環境が体にできあがります。このようにして、薬剤耐性菌は発生し、ときに体を飛び越えて人から人へ、また、人から環境へと拡散していきます。



3. かぜと抗生剤

風邪は、ウイルスが鼻やのどにくっついて炎症を起こし、くしゃみ、鼻水、せき、たん、のどの痛み、発熱などがでることを言います。この、「**風邪の原因はウイルス**」というのが大切なポイントです。**風邪を治すのは免疫力であり、薬ではありません。**風邪薬は、風邪のつらい症状を和らげるためのもので、原因のウイルスをやっつける薬ではありません。また抗生剤はウイルスには効かないため飲んでも意味がなく、副作用もあり、耐性菌が発生する可能性もあります。風邪に必要なない抗生剤に大切な医療費を使い、さらにそれを飲んで副作用がでて、耐性菌までできたなど

ということは避けなければなりません。そうはいても、「この前風邪をひいたときにはお医者さんが抗生剤を出してくれたのに・・・」ということもあるでしょう。でも、その時風邪が治ったのは抗生剤のおかげではなく免疫力と休息で自然に治ったのです。もし、今度のお医者さんから「風邪なので抗生剤はいりませんよ」と言われたら、どうかこんな風に考えてみてください。そのお医者さんは、あなたのこと、あなたの家族のこと、そしてあなたの地域のことを、より一生懸命に、より広く、長い目で考えてくれているのです。

